



禁忌に触れし兄弟は
墮落した神に辱しめられ嫫られ
生き地獄で愛しあう

黄泉の国から、ある神が逃げだした。

この世に逃げおおせたはいいが、全身が腐って内蔵や骨が覗くほど、今にも溶けて崩れそうな体。

体の崩壊を防ぐため、力を蓄えるために蛇をたらふく食らい、弾けるような肉体をとりもどしつつ、銅色に肌を染めあげ、腰から下は八匹の大蛇を蛸のように生やした。

化け物じみたさまに変貌しながらも、復元した顔はもとのまま、女のように美麗だから、なおさら異様で。

美醜を兼ねそなえた禍々しい異形の者となつた元神、オマジヤは邪悪な心を宿して、この世で暴虐の限りをつくした。

次々と村を襲い、村人を従わせて貢がせて毎日、酒池肉林の宴を開き、若人と子供を犯したり殺したり。

目に余りすぎる横暴ぶりだつたなれどオオミカミは傍観。

オオミカミの甥っ子にあたり、以前は愛でていた子だけに人の世を乱すのを止めたくても、なかなか踏ん切りがつかず。

懊悩するオオミカミを見かねて「オマジヤを我らの手で罰しましょう」と申しでたのが、兄弟の神、ブラノミコトとザラノミコト。

オマジヤはかつて親しかつたイトコであり、だからこそほかの者の手によって処されるのを見るのは耐えがたく、自らの手で鎮めたいと。

兄弟のいじらしさに心を打たれたオオミカミは「神殺しの劍（つるぎ）」を授けた。

この劍で切り殺せば、元神だろうと、黄泉の国から逃亡を果たした名状しがたい存在だろうと消滅させることができ、あの世にもこの世にもとどまることはない。

オオミカミの切なる思いと力がこめられた神殺しの劍を授かり、村へ向かった兄弟野の神。

村の若人と子供のほとんどを犯し殺して、次の村へ行こうとしていたオマジヤに挨拶もなく、申し開きをさせることもなく斬首。

困り果てていたオオミカミに手をさしのべての討伐だったが、元神を滅ぼした罪から兄弟は人へと成り下がった。

天に帰れなくなった兄弟は、村にとどまりオマジヤに蹂躪された土地

の復興を手伝うことに。

神の力を失いながらも、兄のブラノミコトは人にはない知恵を、弟のザラノミコトは人になく怪力で助力し、人間の寿命の二倍ほどを生きて大往生。

そのあと村では、兄弟を救いの神として祀り崇めて奉納をしているという。

なんて興味深い伝承のある村に俺と弟の克己は車で向かっている途中。聞いた話、電気水ガスが通っていない、江戸時代ごろから時を止めたような村らしく、衛星でとらえられないほどの山奥にあるらしい。

「いや、今も十分に山奥だな」とさっきから延々と山をぐるぐる回っているような景色を眺めてため息。

兄弟そろって曰くありげな村に向かうのは里帰りのためではなく、二人とも大学で民俗学を専攻してのこと。

とって、これは個人的な活動なので自費。

いつもこうして克己と地方を回り、既存する文献などに記されていない伝承を探しだして調査をするのだが、まあ金がかかる。

バイトして費用を貯めたいなれど、その分、活動時間が削られるのは本末転倒のような。

毎度、葛藤しているところ、夏休みにはいるまえ友人から朗報が。

「このごろ地方なんか、継承されてきた祭りや儀式がしたくても人手不足で大変だって話あるだろ？」

まさにあるあるで、人里離れた古めかしい村が若い兄弟を求めているん

だよ。

大昔、村を救ってくれた兄弟の神を演じてほしいらしい。

村には若い人がいないし、年子となればなおさらってんで。

ネットの地図に記されていないほど辺境の地にある、現代的なインフラが整っていない超古風な村なんだけど、条件がめちゃくちゃいい！往復の交通費はもちろん、報酬も奮発してくれるというし、滞在中五日間はすべての面倒を見てくれるし、天然の温泉にはいり放題！

儀式に演者として参加するとなれば、深く懐にはいつて調査できる、しかも五日間も村人と交流すれば多くの聞きこみができるだろ？

こりゃあ、二人で乗りこんで、この世から隔絶されたような怪しげな村の実態を暴いてこないと！なあ！俗学兄弟！」

うますぎる話とあり、克己の了承なく跳びついたもので。

ちなみに「民俗学兄弟」とは学科に兄弟揃っているのが珍しいことで、呼ばれている愛称。

大学以外でも二人つるんで民俗学の活動に勤しんでいるからに、半ば呆れているのだろう。

どれだけ兄弟仲がよく、民俗学ばかなのだと。

たしか幼いころから柳田國男の書物を読んでいた俺は「民俗学ばか」にちがいないが、克己がこの世界に踏みこんだのは大学にはいつてから。

子供のころはどこに行くにも何をすにしろ、かならず二人で。

ただ、中学生になり克己が体育教師に誘われて剣道をはじめてからは、それまでべったりだったのが嘘のように毎日あまり顔を合わせたり口を利かなくなつた。

早朝から夜遅くまで剣道の鍛練をしていたに、すでに民俗学にのめりこんでいた俺との生活パターンが合わなくなつてのこと。

また克己の才能が開花、全国優勝を果たすなどをし、おまけに師匠と日本を回つて道場破りのようなことをしていたから、なおさら。

日本には剣道のプロがないのを師匠が憂い「だったら俺が誕生させますよ」と宣言してのがむしろ励みだったよう。

その活躍ぶりに「剣道をオリンピック種目に！」とどんどん師匠の願いが膨れあがり、その熱意に押されて突き進んでいたのが、高校二年生のとき試合中、脊椎に損傷を負つてしまい。

医師に「生活は送れますが、剣道などのスポーツは・・・」と宣告されて、師匠はその場で崩れて号泣したし、克己は病室のベッドで寝たまま放心。

師匠がいくら諦めないよう説得しても、親がいくら抱きしめて慰めても、上の空でいたのを俺は手をにぎって告げた。

「俺が受験するつもりで大学にいっしょに行って勉強しながら、個人的な民俗学の調査をしないか？」

それからの克己の行動の早さといったら。剣道に打ちこんでいた分、おざなりにしていた勉強を猛烈にこなして、ぎりぎりですべてに間にあったし、大学では新入生代表として堂々と挨拶もしたし（つまり首席だったということ）。

大学にはいつてからは、子供のころにもどったような俺へのストーリーカ
ーぶり。

離ればなれときは三十分おきに連絡して場所を把握、空いた時間は
俺の受けている講義にもぐりこみ、休み時間や昼食はほぼかならず共
に。

大学が終われば、あーだこーだ議論しながら課題をやったり、大学の
書庫や資料室にこもって書物を漁ったり、ネットの情報をたよりに近
辺の細々とした伝承の確認。

休みの日は、単発で高額のバイトをしたり、こうして遠出しての本格
的な調査へ。

ただでさえ民俗学の学科を選ぶ人はすくないというのに、兄弟が二人

三脚で精力的に活動をしていけば、そりやあ民俗学兄弟と囃されるだらう。

教授に「兄弟で民俗学の未来を担ってくれ！」と変に期待され、まわりから「いやあ今日も民俗学ラブなブラコンぶりが眩しいなあ」と冷やかされ、少々、辟易しつつ、いい年して弟とつるんではいるのは満更でもない。

一方で克己が今の状況や環境をどう思っているのかは分からない。昔から飄々として口数少なく、感情表現も豊かなほうではないから。

「剣道への未練はないのかな」と運転する横顔を眺めて思う。剣道の道が絶たれて師匠に見放されて遠い目をしていた克己を、勢いまかせに民俗学の世界に引っ張りこんだ張本人ながら、真っ向から本音を聞きだそうとしたり、腰を据えて話しあいをしたりせず。

「今さら聞けないよなあ」と思いつつ、音楽の音量をあげようとしたら、ガムをとろうとした克己の手に当たった。

ぎくりとして「ごめ」とすかさず手を引けば「いや」とそっけなく応じてガムをとる。

俺が気まずさを噛みしめるのに対し、なにごともしなかつたようにガムを噛む横顔が憎たらしかったが、目についたのは、すこし赤い耳の縁。「もしかしたら未練があるほど、はじめから剣道に情熱はなかつたのかもな」と思いかげ、自嘲するように吐息し、目をつむって助手席に深くもたれた。